

家族同居高齢者の孤独感に関する研究

梶原 杏奈・牧 正興

Research on Loneliness of Senior Citizen Who is Cohabiting with Family

Anna Kajiwara · Seikoh Maki

I. 問題と目的

わが国の平均寿命は、WHO (The World Health Report 2005) によると82歳(男性78歳、女性85歳)と世界最高水準となっている。また、近年の少子化とも相まって、わが国は急速に高齢化が進んでおり、超高齢社会に対応した社会へ転換を図っていくことが求められている。メディアも「老い」の問題をさまざまな角度からとりあげようになった。なかでも、高齢者の孤独、孤立の問題など、高齢者の心を支えることの重要性が指摘され、「高齢者の心のケアが必要」との意見も多々聞かれるようになった。「老いの心理学的問題」を考えることは、現在最も重要な課題の一つといえよう(黒川 2005)。

ハヴィガースト(1953)は老年期の発達課題として「肉体的力と健康の衰えに適応すること」「引退と収入減少に適応すること」「配偶者の死に適応すること」「自分の年頃の人々と明るい親密な関係を結ぶこと」「柔軟なやりかたで社会的な役割を身につけ、それに適応すること」「肉体的生活を満足におくれるよう準備すること」を挙げている。また、R.E.ベック(1968)はE.H.エリクソンの理論を基に老年期の危機として、退職や子どもの独立などに対する「引退の危機」、身体の若さや活動性や健康が失われていくことに対する「身体的健康の危機」、自分の死を現実のものとして予感した時から始まる「死の危機」の3つを挙げている。さらに、竹中(1996)は高齢者の心性を強く規定するものとして、死、喪失体験、孤独感を挙げている。そのなかでも孤独は、自立が難しくなる高齢者では精神的に大きなテーマであり、深刻なテーマだけに避けて通ろうとすると指摘している。さらに、E.H.エリクソン(1988)は、人は発達において親密の能力といくらかの孤独への欲求との間でバランスをとって初めて、愛する相手と愛される相手に本当の相互性をもってかかわることが可能になるが、老年期になると、何十年もの間持ちこたえてきた人間関係と、それより新しい人間関係との両方の状況の中で、これらの問題に立ち向かう。また、生涯のパートナーや長年の友人と死に別れることによって課せられた孤独と対峙させられると述べている。また、状況から生じる孤独とは別に、老いとは本質的に孤独であるというテーマがある(竹中

2002)。

これまでの研究では、老年期と孤独とが直接結びつくという結果は得られていないが、高齢者にとって孤独が問題視されていないわけではないと言っている。わが国では、高齢者の自殺率が高いが、孤独は自殺者の心理的背景としてしばしば指摘される問題である。また、エンジェル(1962)によれば、「抑うつ状態は老人に共通的な特徴であり、孤独や、繰り返す喪失体験への反応」としている。したがって、高齢者の孤独は精神的健康や幸福感に強い影響を与える感情で、高齢者のサクセスフル・エイジングのために適切な対応が求められる課題である(青木 2001)。

そもそも孤独感とは、長田(1982)によると「人の社会的関係における何らかの欠損から生じる、主観的な経験なのである」としている。工藤ら(1983)は「孤独感とは欲求レベルと充足レベルの食い違いから起こる不快かつ主観的な経験なのである」と述べており、Perlmanら(1981)によると、「孤独感とは、個人の社会的関係のネットワークが量的に又は質的にある重要な点で欠けた場合に起こる不快な経験である」と定義している。以上の孤独感の定義から、①孤独感とは個人の社会的関係の欠如によるものである②孤独感とは主観的な体験である③孤独感とは不快である、という共通点を挙げるができる。そこで、本研究において孤独感とは、「人間が他者と関わることが可能な環境にいるにも関わらず、個人の社会的関係の量的な又は質的な欠損が生じ、それによる不快な主観的な経験または感情である」と定義する。

また、「高齢者の孤独」について遠藤(1982)は「住居形態の違いが孤独意識の強さに関連し、施設では在宅よりも明らかに孤独意識が高いと報告している。一方、落合(1999)は「青年の孤独は、自己とのかかわり、自己の内面への関心による対自的なものであるのに対し、年齢が上がってくるにつれて、その孤独は他者とのかかわり、自己外との関係性によって感じる因子が強くなる」としている。さらに庄司(2005)は「高齢者の孤独」を捉える視点として、「高齢者の孤独」とは生活形態ではなく、高齢者と社会諸関係の関係性を考慮した上で理解すべきであり、「高齢者の孤独」は疎外感や孤独感、若年像に対する嫉妬、人間関係や生きる空間の狭隘化と

いった状況として現れてくるものとして考えている。

高齢者にとって、自らの安定を保つためには、すでに社会的に認められている社会の一員として入り込むか、自分たちを守ってくれる集団に入り込むなどが考えられる(藤田 1997)。そのなかで、家族や親類などの安全を保証してくれるネットワークは重要なものとなってくる。庄司(2005)は、三世帯五人家族で暮らしながら、孤独感に悩まされている高齢者の事例を報告しており、他の家族との生活意識の齟齬がみられている。それには、家族関係を高齢者自身とその家族がどう捉えているのかが関係していると考えられる。さらに、高齢者の孤独感について藤原ら(1987, 1988)は、一人暮らしの高齢者や老人ホーム入居高齢者が他の高齢者に比べて孤独感が強いとはいえないことを報告している。したがって、高齢者のみの世帯ではなく子どもの家族と同居しているような一見、他者と関わることに恵まれていると思われる環境にいなながらも、孤独を感じている高齢者がいると考えられる。しかし、高齢者自身が捉えている孤独感と家族が同居している高齢者の孤独をどう捉えているかということを確認した研究は皆無に等しい。

そこで、本研究では、家族と同居している高齢者と施設に入所している高齢者の孤独感の違いを明らかにする。さらに、家族同居高齢者(高齢者夫婦のみの世帯ではなく、子ども家族とも同居している高齢者と定義する)からみた自身の孤独感と、家族が同居している高齢者に対して抱いている孤独感との関係およびその特徴、質を明らかにする。その結果をもとに、家族同居高齢者に対するその後の心理的援助について検討する。

II. 方法

1. 調査対象

ここで高齢者とは、国勢調査での高齢者統計のとり方や老齢基礎年金を受給することができる年齢、WHOをはじめ国際的にも区分されているように65歳以上の者とし、認知症の診断を受けていない者に限定した。

家族同居高齢者(以下、同居高齢者とする)については、A県、B県、C県、D県、E県の2世代以上の世帯で、同居高齢者(一名)とその家族として2世代目の妻を一組とし、47家族に配布した。

2. 調査内容、調査方法

ラッセルら(1978, 1980など)によって作成された改訂版 UCLA 孤独感尺度を、諸井(1991)が邦訳した改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(20項目)を使用した。この尺度は、10代の青年から高齢者まで幅広い利用が可能であり、高校生・大学生を対象にした調査では.865～.905と高い α 係数が算出されている。しかし、対象が青年期であったため、本調査の分析では本尺度を高齢者用として再度検討を加えた。以下、この尺度を孤独感尺

度とする。

回答形式は、「たびたび感じる」から「決して感じない」までの4件法とした。この尺度の得点は20点から80点に分布し、得点が高いほど孤独感が強いと考えられる。

質問紙に対する回答方法は、原則として自己記入で実施した。しかし、対象が高齢者であるということで口頭による回答は可能でも、自分で記入することが困難な者、記入が億劫な者もあったため、その場合は家族や親戚、筆記者が代筆、または聴き取り調査を実施した。調査方法については、家族同居高齢者とその家族に対しては委託調査と郵送調査、施設入所高齢者については、面接調査と委託調査を実施した。ただし、家族には「同居している高齢者について」の孤独感という条件での回答とした。

家族同居高齢者とその家族については、他者に見られることを避けるため、回答後にそれぞれ両面テープのついた封筒に調査用紙を入れ、封をしてもらうこととした。

3. 調査期間

2006年11月から2006年12月の間で実施した。

III. 結果

1. 回収率

42家族より回収があり(回収率89.36%)、有効回答であった37家族、43組を分析対象とした。施設入所高齢者(以下、施設高齢者とする)については、A県、B県、C県のF施設、G施設、H施設に入所している高齢者41名に配布し、40名より回収があり(回収率97.56%)で、有効回答であった39名を分析対象とした。

家族同居高齢者については、65歳から91歳の平均年齢78.53(標準偏差6.90)で、性別の内訳は男性11名、女性32名であった。施設入所高齢者については、68歳から96歳の平均年齢83.68(標準偏差6.58)で、性別の内訳は男性5名、女性32名であった。

2. 孤独感尺度の得点の差

①同居高齢者と施設高齢者の孤独感尺度の総合得点を孤独感の指標とし、その強さの差をみるため、孤独感尺度についてt検定を行なった。その結果、同居高齢者よりも施設高齢者の方が得点が有意に高かった($t(78) = 3.201, p < .01$) (Table 1 参照)。

Table 1. 同居高齢者と入所高齢者の孤独感尺度のt検定

	平均	標準偏差	t 値
同居高齢者	1.650	0.454	3.201**
施設高齢者	2.027	0.598	

** $p < .01$

②同居高齢者自身の孤独感と、その家族が同居高齢者に

ついて考える孤独感（以下、家族の孤独感とする）の強さの差をみるため、孤独感尺度についてt検定を行なった。その結果、両者の間に有意な差はみられなかった ($t(42)=1.435, n.s.$) (Table 2 参照)。

Table 2. 同居高齢者とその家族が捉える孤独感尺度のt検定

	平均	標準偏差	t 値
同居高齢者	1.650	0.454	1.435n.s.
家族	1.767	0.598	

3. 同居高齢者と家族の孤独感尺度の相関

同居高齢者と家族間に孤独感の強さについて有意な差はみられなかったが、両者の間にどの程度の関連性があるかをみるために、ピアソンの積率相関係数の算出を行なった。その結果、両者の相関が有意であった ($\gamma=0.508, p<.01$) (Table 3 参照)。

Table 3. 同居高齢者と家族の孤独感との関連

	同居高齢者	家族
同居高齢者	—	0.508**
家族	0.508**	—

**p<.01

4. 同居高齢者と施設高齢者の孤独感尺度における因子分析

①同居高齢者と施設高齢者の孤独感がどのような因子から影響を受けているのかをみるため、同居高齢者と施設高齢者の孤独感尺度20項目に対して、最尤法による因子分析（バリマックス回転）を行なった。その結果、因子負荷量.40以上を基準として、初回の因子分析で3項目、

2回目の因子分析で1項目が削られ、最終的に残った16項目を採用した (Table 4 参照)。

第1因子は「私は、他の人たちから孤立している」「私は、今、だれとも親しくしていない」「私をよく知っている人はだれもない」などの項目からなっているので、「対人不信感」因子と命名した。第2因子は「私には、話しかけることのできる人たちがいる」「私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている」「私は無視されている」などの項目からなっているので、「対人消極性」因子と命名した。第3因子は「私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる」「私には、親密感の持てる人たちがいる」「私には、頼りにできる人たちがいる」という項目からなっているので、「孤立感」因子と命名した。

②尺度の信頼性の検討を行なうために、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、下位尺度ごとでは、「対人不信感」因子が0.839、「対人消極性」因子が0.816、「孤立感」因子が0.725であり、信頼性が保証された。尺度全体では、0.877と高い信頼性が保証され、尺度の内的整合性が高いことが示された (Table 5 参照)。以下の分析では、ここで内的整合性が得られた下位尺度を用いることとする (以下、下位尺度とする)。

Table 5. 孤独感尺度の下位尺度の信頼性検討の結果

因子名	項目数	α	平均値	標準偏差
対人不信感	9	0.839	16.538	6.288
対人消極性	4	0.816	6.075	2.854
孤立感	3	0.725	4.963	2.314
全体	16	0.877	27.575	9.491

Table 4. 孤独感尺度の因子分析結果 (最尤法、バリマックス回転後)

項目	F 1	F 2	F 3	共通性
孤独14 私は、他の人たちから孤立している	0.704	0.452	0.158	0.726
孤独7 私は、今、だれとも親しくしていない	0.680	0.148	0.118	0.499
孤独13 私をよく知っている人はだれもない	0.623	6.701E-02	0.513	0.656
孤独12 私の社会的なつながりはうわべだけのものである	0.609	8.278E-02	0.247	0.439
孤独18 私には、知人はいるが、私と同じ考えの人はいない	0.495	6.036E-02	0.434	0.437
孤独17 私は、たいへん引っ込み思案なのでみじめである	0.474	0.268	2.669E-02	0.297
孤独2 私は、人とのつきあいが無い	0.460	-6.399E-02	-2.753E-04	0.216
孤独8 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう	0.436	1.338E-03	0.325	0.296
孤独3 私には、頼りにできる人がだれもない	0.419	0.129	0.229	0.245
孤独19 私には、話しかけることのできる人たちがいる	5.530E-02	0.938	0.217	0.929
孤独1 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている	8.473E-03	0.639	0.144	0.429
孤独11 私は、無視されている	0.539	0.587	0.119	0.650
孤独15 私は、望むときにはいつでも、人とつきあうことができる	0.333	0.539	0.263	0.471
孤独16 私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる	0.195	0.261	0.831	0.797
孤独10 私には、親密感の持てる人たちがいる	0.250	0.192	0.592	0.450
孤独20 私には、頼りにできる人たちがいる	-2.44E-02	0.348	0.482	0.354
固有値	4.728	2.178	0.983	
寄与率 (%)	29.549	13.612	6.145	
累積率 (%)	29.549	43.161	49.306	

5. 同居高齢者と施設高齢者の孤独感

①高齢者の住居形態と下位尺度による孤独感の差をみるため、2要因の分散分析を行なった。その結果、住居形態と下位尺度について有意な交互作用はみられなかった ($F(2, 156) = 2.778, n.s.$)。しかし、下位尺度の主効果は有意で ($F(2, 156) = 7.996, p < .001$)、主効果の比較を行なうと、「対人不信感」と「対人消極性」間に有意な差がみられた ($p < .05$)。また、住居形態による主効果も有意であった ($F(1, 78) = 9.642, p < .01$) (Table 6, Figure 1 参照)。

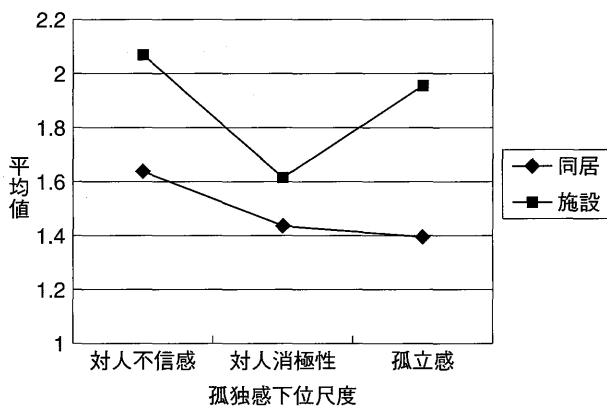


Figure 1. 高齢者の住居形態と孤独感下位尺度

②高齢者の住居形態による下位尺度ごとの差をみるため、各下位尺度についてt検定を行なった。その結果、「対人消極性」については有意な差はみられなかった ($t(78) = 1.902, n.s.$) が、「対人不信感」は施設高齢者の方が有意に高かった ($t(78) = 2.873, p < .01$)。また、「孤立感」についても施設高齢者の方が有意に高かった ($t(78) = 3.313, p < .01$) (Table 7, 8, 9 参照)。

Table 6. 高齢者の住居形態と孤独感下位尺度についての2要因の分散分析結果

	住居形態		主効果		
	同居	施設	住居形態	孤独	交互作用
対人不信感	1.638 (0.686)	2.069 (0.648)	9.642**	7.996***	2.778n.s.
対人消極性	1.436 (0.590)	1.615 (0.832)			
孤立感	1.395 (0.500)	1.955 (0.917)			

上段：平均値、下段：標準偏差
** $p < .01$ 、*** $p < .001$

Table 7. 住居形態による対人不信感のt検定

	平均	標準偏差	t値
同居高齢者	1.638	0.686	2.873**
施設高齢者	2.069	0.648	

** $p < .01$

Table 8. 住居形態による対人消極性のt検定

	平均	標準偏差	t値
同居高齢者	1.436	0.590	1.092n.s.
施設高齢者	1.615	0.833	

Table 9. 住居形態による孤立感のt検定

	平均	標準偏差	t値
同居高齢者	1.395	0.500	3.313**
施設高齢者	1.955	0.917	

** $p < .01$

6. 同居高齢者と家族が捉える同居高齢者の孤独感

①同居高齢者と家族が捉える同居高齢者の下位尺度による孤独感の差をみるため、2要因の分散分析を行なった。その結果、同居高齢者一家族（以下、対象者とする）と下位尺度について有意な交互作用はみられなかった ($F(1.740, 146.168) = 2.701, n.s.$)。主効果では、下位尺度について、有意な主効果はみられなかった ($F(1.740, 146.168) = 1.787, n.s.$)。また、対象者についても有意な主効果はみられなかった ($F(1, 84) = 1.798, n.s.$) (Table 10, Figure 2 参照)。

Table 10. 対象者と孤独感下位尺度についての2要因の分散分析結果

	対象者		主効果		
	高齢者	家族	対象者	孤独	交互作用
対人不信感	1.638 (0.686)	1.630 (0.600)	1.798n.s.	1.787n.s.	2.701n.s.
対人消極性	1.436 (0.590)	1.645 (0.710)			
孤立感	1.395 (0.500)	1.659 (0.669)			

上段：平均値、下段：標準偏差

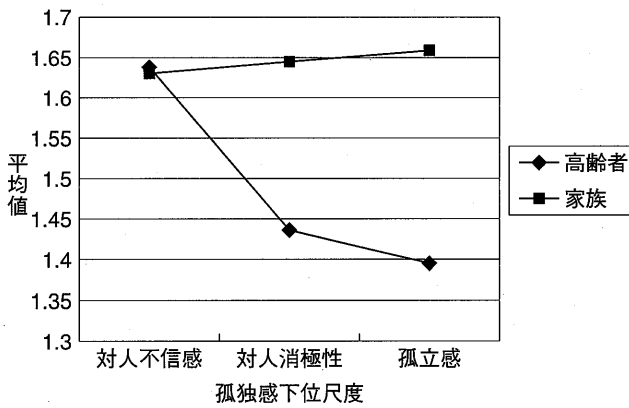


Figure 2. 対象者と孤独感下位尺度

②対象者による下位尺度ごとの差をみるため、各下位尺度についてt検定を行なった。その結果、「対人不信感」(t(42)=0.66, n.s.)と「対人消極性」(t(42)=1.902, n.s.)について、有意な差がみられなかった。しかし、孤立感については家族が捉えたものの方が有意に高かった(t(42)=2.957, p<.01) (Table 11, 12, 13参照)。

Table 11. 対象者による対人不信感のt検定

	平均	標準偏差	t 値
高齢者	1.638	0.686	0.066n.s.
家族	1.631	0.600	

Table 12. 住居形態による対人消極性のt検定

	平均	標準偏差	t 値
高齢者	1.436	0.590	1.902n.s.
家族	1.645	0.710	

Table 13. 住居形態による孤立感のt検定

	平均	標準偏差	t 値
高齢者	1.395	0.500	2.957**
家族	1.659	0.669	

**p<.01

7. 同居高齢者とその家族、施設高齢者の孤独感 (因果関係について)

下位尺度についての因果関係をみるために、Figure 3 のモデルを予測し重回帰分析を行なった。

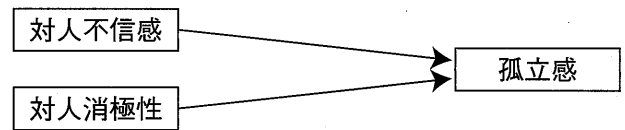


Figure 3. 孤独感下位尺度の因果関係の予測

その結果、同居高齢者では「孤立感」に対して、「対人消極性」から正のパス ($\beta=0.714, p<.001$) が示された。一方、家族では「孤立感」に対して、「対人不信感」から正のパス ($\beta=0.490, p<.05$) が示された。また、施設高齢者では「孤立感」に対して、「対人不信感」から正のパス ($\beta=0.550, p<.01$) が示された (Table 14, Figure 4 参照)。

Table 14. 孤独感下位尺度の重回帰分析結果

	孤立感		
	同居高齢者	家族	施設高齢者
	β	β	β
対人不信感	-0.033n.s.	0.490*	0.550**
対人消極性	0.714***	0.346n.s.	0.072n.s.
R ²	0.500***	0.651*	0.361**

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

β = 標準偏回帰係数

IV. 考察

1. 孤独感尺度の得点の差

同居高齢者と施設高齢者の孤独感尺度の差を比較すると、施設高齢者の方が有意に孤独感が高いという結果が得られた。これは、先に述べた藤原ら (1987, 1988) の研究で得られた結果とは異なる。その要因として、藤原らは独居高齢者も施設高齢者と同じ群に含んでおり、独居高齢者の孤独感得点が影響していることが考えられる。しかし、独居や高齢者のみの世帯も含め在宅高齢者とする点では相違があるものの、遠藤 (1982) が先行研究で

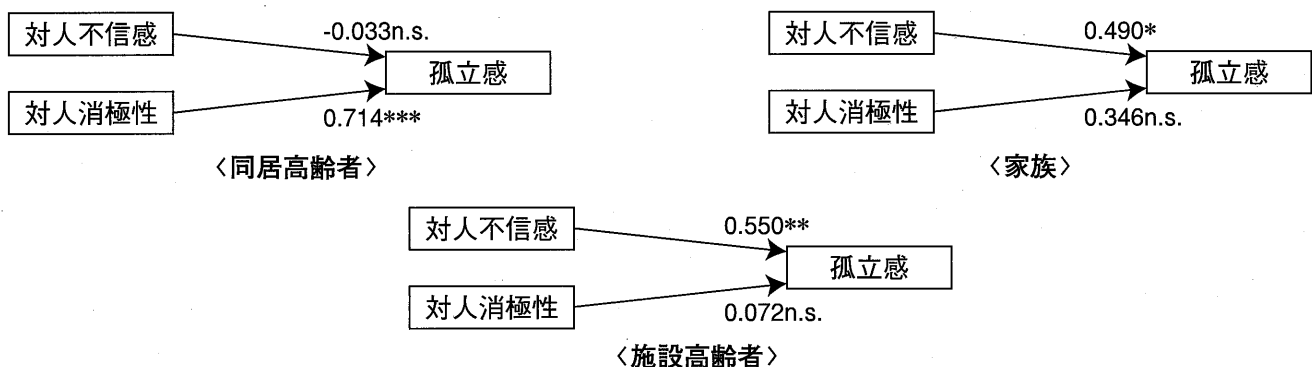


Figure 4. 孤独感下位尺度の対象者別のパス解析結果

得た結果と一致する。老年期に「孤立」の問題がしばしば出てくるが、配偶者の喪失や介護など家庭の事情で施設に入所する高齢者は、同居高齢者より孤立を味わうことになり孤独感が強くなることが考えられる。

同居高齢者とその家族が捉える同居高齢者の孤独感尺度の差では、有意な差はみられなかった。同居高齢者の孤独感と家族が高齢者に対して捉える孤独感に、量的な差はないといえる。

2. 同居高齢者と家族の孤独感尺度の相関

同居高齢者とその家族の孤独感の強さについて、両者間に有意な正の相関がみられたため、同居高齢者の孤独感が強いとその家族が捉える高齢者の孤独感も強くなることはいえる。このことから、高齢者の孤独感の強さを、家族が認知しているということが考えられ、互いにずれがなく共に生活を営みやすいということが考えられる。しかし、高齢者・家族ともに孤独感が強い家庭にはいくつかの問題点が挙げられる。葉山(1994)の研究では、家族関係において不満を持つものは孤独感に陥りやすいことが明らかになっている。今回、家族関係の満足度については明らかにしていないが家族関係に問題があり、それを互いに意識していることから、両者の孤独感の強さが一致しているということが、まず挙げられる。また、互いに孤独感の強さに気づいていながらも、状況が変わらないまま過ごしていることも考えられる。

一方、少数ではあるが高齢者は孤独感を強く感じているにも関わらず、家族は高齢者の孤独感を低いものと考えているものがある。庄司(2005)は、世帯主の妻が中心となり家事を行っており、「何もしなくていい」と言われたことに疎外感を強く感じる女性高齢者の面接調査の例を報告している。これは、ロゾー(1974)が老年期を「役割喪失の時期」と呼んだことと関係があり、家族が気を遣ってしたことが高齢者にとっては家の中での役割を喪失し、疎外されていると感じてしまうことから、このようなずれが生じたことが考えられる。この他にも、生活意識の齟齬から現れる孤独感の例が報告されている。

3. 同居高齢者と施設高齢者の孤独感

高齢者の住居形態と下位尺度については、有意な交互作用はみられなかったものの、住居形態による主効果は有意であり、住居形態により下位尺度に差があり施設高齢者の方が得点が高いということがわかった。老年期は人間関係の喪失が多くなり、新しく人間関係を持つことが難しくなる(竹中 2002)。したがって、人間関係の喪失体験に加え、新しい人間関係のなかで生活を営まなければならない施設高齢者の方が、近しい存在である家族と同居する高齢者より下位尺度が高くなることが考えられる。

また、下位尺度には有意な主効果があり、主効果の比較で「対人不信感」と「対人消極性」の間に有意な差が

みられた。このことから、同居高齢者と施設高齢者双方にみられる孤独感の特徴として、「対人消極性」より「対人不信感」の方が強いということがわかった。老年期のパーソナリティの変容として、個人差はあるが目や耳の機能が衰えることによって「疑い深い」傾向(佐藤 1997)や、内向的傾向が強まる(ニューガーデン 1964、シャイイ 1976)ことが指摘されている。内気で消極的であるということは、今回の対象者の世代では女性が多いということもあり、受け入れがたいものではなく、否定的に捉えることは少ないことが考えられるため、「対人消極性」より「対人不信感」の方が強いという特徴が示されたと考えられる。また、孤独感についてほぼ同じ特徴を持つといえる。したがって、同居高齢者と施設入所高齢者は孤独感の特徴は似たものであるが、家で家族とともに生活する者より、家族と離れ施設で生活する者の方が孤独感が強いことがわかった。

住居形態による下位尺度ごとの平均値の差をみると、「対人消極性」については有意な差がみられなかったが、「対人不信感」と「孤立感」において施設高齢者の方が有意に高かった。これは、上述したようなパーソナリティの変容に加え、家族と離れて生活していることで「孤立感」が高いことはいえる。また、施設での聴き取り調査の際「いつ(家に)戻れるのかわからない」「どうしてここにいなければいけないのか」との意見が多く、それが「対人不信感」が同居高齢者より強い要因となっていると考えられる。

4. 同居高齢者と家族が捉える同居高齢者の孤独感

対象者と下位尺度について有意な交互作用はみられず、さらに下位尺度、対象者について有意な主効果もみられなかった。したがって、同居高齢者とその家族の孤独感の強さに差はなく、両者の孤独感の特徴についても特に違いがみられなかった。このことから、共に暮らしている家族が、高齢者のことをよく観察していることが考えられる。

対象者による下位尺度ごとの平均値の差をみると、「対人不信感」には差がみられなかったが、「対人消極性」「孤立感」は家族が捉えたものの方が有意に高かった。これは、「対人消極性」については、上述したように世代間の考え方の相違によるものであると考えられる。また、「孤立感」については、介護や心理的支えに関して子どもに頼りたいという高齢者は多い(直井 1997)のに対し、立場は違うが、家族は自分が高齢者にとって「親密感を持てる」「理解してくれる」「頼りにできる」存在であると思っていないことが考えられる。

5. 同居高齢者とその家族、施設高齢者の孤独感

(因果関係)

長田ら(1989)によると、Perlman&Peplau(1981)は、孤独を個人の社会的関係におけるネットワークの量的・

質的な不十分さからもたらされる不快な経験であるとした。そこで、対人関係の要因が孤独感に影響を及ぼすということで、Figure 3のモデルを予測し、下位尺度の因果関係をみた。

同居高齢者では、「孤立感」に対して「対人消極性」の強さが促進要因として影響することが示された。このことから、対人関係における消極性が「孤立感」を高めるといことが考えられる。一方、家族は同居高齢者の「孤立感」に対して「対人不信感」の強さが促進要因として影響することが示された。このことから、家族は対人関係における不信感が、同居高齢者の「孤立感」を高めると考えていることがいえる。したがって、同居高齢者自身と、その家族が捉える同居高齢者の孤独感下位尺度の因果関係には相違があると考えられる。

施設高齢者では、「孤立感」に対して「対人不信感」の強さが促進要因として影響することが示された。このことから、対人関係における不信感が「孤立感」を高めるといことが考えられる。

V. 総合考察—臨床的応用に向けて—

本研究では、同居高齢者は施設高齢者に比して孤独感が低く、その特徴に類似点があることが明らかになった。これは、遠藤(1982)の「住居形態の違いが孤独意識の強さに関連する」ということと一致し、死別についての回答は求めなかったが、人間関係の変動が孤独感の強さに関連することが考えられる。加えて、孤独感下位尺度の因果関係においては、両者について、質は違うが対人関係の要因が「孤立感」に影響を及ぼしていることが考えられる。したがって、対人関係を促進するような心理的援助の必要性が高まる。これらについては、バトラー(1963)により提唱された過去を想起するように促すことで、情動の安定などの心理的効果を導く対人援助手段である回想法が挙げられる。現在、回想法は地域在住高齢者に向けたものから、施設や病院で行なわれるものまで幅広く実施されている。同居高齢者より孤独感が強い施設高齢者に対しては、コンサルテーションを通して、施設高齢者と多くの時間をともにする施設スタッフと連携して、孤独感のケアを行なうことも有効であろう。

また、同居高齢者と家族では、孤独感の強さとその特徴に差がみられず、同居高齢者の孤独感が高ければ、その家族が高齢者について捉える孤独感も高いことが明らかになった。孤独感下位尺度の因果関係については、同居高齢者は「対人消極性」が「孤立感」を促進する要因として働くのに対し、家族は「対人不信感」が「孤立感」を促進する要因であると捉えていることがわかった。このことから、同居高齢者とその家族が捉える孤独感には量的な差はないが、質的な相違があることが考えられる。この相違によるずれ違いが顕著な形で表れたのが、同居高齢者と家族が捉えた孤独感がともに強い家庭であるこ

とが推測される。孤独感の強さが同居高齢者と家族が捉えたもので差がある家庭にも、同じことが要因として挙げることができるだろう。これらの孤独感が強い高齢者に対する心理的ケアとして、高齢者自身へのケアをはじめ、家族へのアプローチの必要性も考えられよう。

VI. 今後の課題

今回の研究では、施設高齢者に対しては個別に調査を行なったものがほとんどであったが、同居高齢者については家族ごとに質問紙を配布する形をとった。同居高齢者では、わからない部分を他の家族や親戚といった第三者が教えながら実施したという報告もあったため、ありのまま回答することが難しかったことが懸念される。そのため、今後の課題として調査方法の再検討が挙げられる。

また、今回は家族同居とひとくくりにしたが、高齢者自身がもともと暮らしていた家なのか、子どもの家に高齢者が入ったのかで孤独感は違うことが予想される。それに加え、最近では別居ではあるものの、行き来に不自由しない距離に住むという形が増えてきている。これらの要因と孤独感についての検討も今後行なっていく必要がある。

<参考・引用文献>

- 青木邦男、2001、在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因 地方都市の調査研究から、社会福祉学、42、1、125-136
- 馬場禮子 永井徹 共編、ライフサイクルの臨床心理学、1997、培風館
- E.H.エリクソン、ライフサイクル、その完結、1989、みすず書房
- E.H.エリクソン J.M.エリクソン、老年期、1990、みすず書房
- 遠藤マツエ、1982、家庭生活における高齢者の孤独意識(2)在宅者と施設入所者の比較、家政学雑誌、33、9、488-497
- 福祉士養成講座編集委員会 編集、老人・障害者の心理、1997、中央法規
- 藤崎宏子、高齢者・家族・社会的ネットワーク、1998、培風館
- 藤田綾子、高齢者と適応、2000、ナカニシヤ出版
- 葉山桂子、1994、高齢者の孤独感に関する研究、筑紫女学園短期大学紀要、29、263-287
- 井上勝也 責任編集、老人の心理と援助、1997、メヂカルフレンド社
- 井上勝也 長島紀一、老年心理学、1980、朝倉書店
- 井上俊ほか、成熟と老いの社会学、1997、岩波書店
- I. ステュアート=ハミルトン、老いの心理学、1995、岩崎学術出版社
- 岩淵千明 編著、あなたもできる データの処理と解析、1997、福村出版
- J.S.タンストール、老いと孤独、1978、垣内出版
- J.W.ウォーデン、グリーフカウンセリング 悲しみを癒すためのハンドブック、1993、川島書店
- 鎌原雅彦ほか、心理学マニュアル 質問紙法、1998、北大路書房
- 春日キスヨ、家族の条件 豊かさのなかの孤独、2000、岩波書店
- 加藤伸勝、心と社会のメンタルヘルス 生きることと死ぬこと、2001、大空社

小室豊允、老人の健康と心理、1989、中央法規出版
厚生労働省監修、平成17年度版 厚生労働白書
厚生労働省監修、平成17年度版 労働経済白書
黒川由紀子 編、老いの臨床心理 高齢者のこころとケアのため
に、1998、日本評論社
松田修、老年臨床心理学、2005、有斐閣
長田久雄ほか、1989、高齢者の孤独感とその関連要因に関する心
理学的研究、老年社会科学、11、202-217
中野善達・守屋國光 編著、老人・障害者の心理、1998、福村出
版
小塩真司、SPSS と Amos による心理・調査データ解析、2004、
東京図書
R.J.ハヴィガースト、ハヴィガーストの発達課題と教育、1997、
川島書店
下仲順子 編、老年心理学、1997、培風館
庄司知恵子、2005、農村高齢者の日常生活にみる孤独のメカニズ
ム、現代社会学研究、18、69-88
曾我昌祺、高齢者のこころのケア、2006、金剛出版
染谷倭子 編、老いと家族 変貌する高齢者と家族、2000、ミネ
ルヴァ書房
竹中星郎、新訂 老年期の心理と病理、2002、放送大学教育振興
会
谷口幸一 編著、成熟と老化の心理学、1997、コレール社
寺田晃 佐々木英忠 編、老いとこころ、1996、日本文化科学社
上里一郎 監修、高齢者の「生きる場」を求めて—福祉、心理、
介護の現場から—、2006、ゆまに書房
ウルズラ・レーア、老いの心理学、1991、六法出版社
山本真理子 編、人間の内面を探る「自己・個人内過程」心理測
定尺度集：I、2001、サイエンス社